■研究十二月往来〈101〉

『不知記』所引藤若連歌小考

竹本幹夫

永和四年中の崇光院宸記である『不知記』四月二十五日条は、世阿弥の生年考証の第一級資料として知られる。そこに所引の藤若時代の世阿弥の連歌については、すでにいくつかの考証があるが、なお意味の通りにくい所もあるように思われる。今回ここで取り上げたいのは、次の部分（傍線部）である。

きく人そ心空なるほとゝきす
しけるわか葉はたゝ松の色　垂髪
風の声・おとゝもせす、たゝ風とはかり仕、堪能也云々。此ほめ所は強不甘用哉。此脇句には、贈答事ちとありし也。大事歟。
いつふるそ卯の花かきの庭の雪
自関東上洛禅僧参仕云々。
松か枝のふちのわか葉に千とせまてかゝれ
とてこそ名つけそめしか
此児云、給五明之時、被書此哥。此童先年十三歳ニテ参之時、被付藤若名字事云々。今年十六歳歟。御句詞此哥甘用歟。然而雀子ゑの子なとの心ちする詞也。此心ニテよき詞可被案付哉。

右の傍線部について、梅原章太郎氏は、垂髪（藤若）の句を恋の句と捉える立場から、この付合は新古今・恋三「聞くやいかに上の空なる風だにも松に音する習ひありとは」を踏まえたとされ、該部分を「『風の声』『風の音』とも詠まず、ただ『風』を字面に現れない付筋の要とするだけであるのが、堪能」と解釈された（『世阿弥の付句について』、『観世』昭和63・9）。しかし一句の仕立てとしては恋の気分は感じられない。この歌の第二句の「上の空」は「風」との寄合語ではあるが、現在見る藤若の句にはそうした詞はない。

先の引用部によれば、「垂髪」すなわち藤若の詠んだのは「脇句」であり、それとともに発句「聞く人ぞ」をも掲げ、脇句に注釈を加えたものらしい。発句の作者が記入されておらず、良基作の可能性も無いとはいえぬものの、これは不明とせざるを得まい。また「何時降るぞ」の作者は「自関東上洛禅僧」であるらしく、法名等は崇光院にこの一件を報告した者にもわからなかったものであろう。これはたんに当日の秀逸を別に掲げただけともみなし得ぬことはないが、恐らくは藤若の脇句に続く第三であったと思われる。発句以下いずれも初夏の句で、永和四年四月中の興行にふさわしい内容といえよう。

この第三の後の、和歌と「此児云、給五明之時、被書此哥」以下が、藤若の脇句に対する崇光院の解釈を記した部分である。長大な注記であるために、脇句の左注に収まりきれず、とりあえず第三までを記した後に再度加筆したものであろう。かなり詳細な補筆であるだけに、筆者である崇光院のこだわりが感じられるが、そのこだわりとは、脇句の左注に紹介された、「強ちに肝要ならざる褒め所」への反論の根拠を示すものだからであろう。

さてこの藤若の連歌についての当日の評判である引用文傍線部「風の声」以下を文字通り解釈すれば、「『風の声』とか『（風の）音』とかせずに、ただ『風』とだけ付けたのはなかなか素晴らしいという評判だが、このほめ方は心ずしも当を得たものではない。この脇句には挨拶の意味合いが少々ある。そこが着眼点だろう」ということになる。この前半部が藤若の脇句に対する当座の評であるなら

ば、前掲の評語中に見えていた「風」という詞は、当然脇句の中で用いられていなければならなかったと考えられよう。そうでなければ、右の傍線部はまったく意味不明の不可解な文章なのである。これを先の梅原氏の御説のごとく、「字面に現れない付筋」と考えるのは、「風とばかり仕る」という評語に照らしても、かなり無理であろう。「仕る」というのは、「詠む」「付ける」などと同意と考えてよい。そしてもし脇句に「風」という詞が入るとすれば、末句の「ただ松の色」の部分以外には考えられない。すなわち藤若の句は、

しけるわか葉はたゝ松のかせ

となっていたのではなかったか。

「ただ松の風」であった場合、一句は「若葉の季節となり、ひたすら郭公の初音を待っているのに、耳に聞こえてくるのは松風の音ばかりである」といった意味の、挨拶の意味合いが希薄な、純粋に文芸的な叙景句となる。ただしこれでは梅原氏が前掲考に紹介された『文和千句』第一百韻の良基の著名な脇句「(名は高く声は上なし郭公)茂る木ながら皆松の風」と余りに似過ぎており、表現としては「ただ松の色」の方がよかろう。第三の「何時降るぞ卯の花垣の庭の雪」にしても、脇句が「ただ松の風」であれば、一句は「いつの間に卯の花は松風に吹き散らされたのか。一面雪が降り積もったような庭の景色だ」という説明的な印象の付句になる。この場合も脇句の末は、「卯の花」の白と対照的な「松の色」の方が断然面白いはずであろう。脇句の中に「風」の詞がない方が、第三の「何時降るぞ」詞も生きてこよう。そしてこれらの句を伝聞した崇光院自身もそう思ったのではないか。

一体、漢字「色」と草体「可」「世」(かぜ)とは甚だ紛れ易く、たんなる偶合ではあろうが、『不知記』の該部分の「色」も草体「可」と「世」を組み合わせたような書体になっている。崇光院は、恐らくは曖昧な書体でメモされていたであろう藤若の句を、発句や第三との関連から「ただ松の色」と読んでしまい、ために「風の声」以下の褒詞が的外れなものに聞こえて、むしろこの付合の背後に存在する「贈答事」に注目すべきだと考えたのではあるまいか。「松の色」となっていれば、発句で「藤若の名声を聞く人は心も空になることよ」と賞賛されたのに対し、脇句で「この名誉もすべて准后の御恩徳の賜で、それは初夏の若葉に松の緑が照り映えているようなものです」と、挨拶を返したことになる。そしてそのような挨拶の背景を説明するには、「松が枝の」の和歌と藤若の名とが与えられた経緯を紹介するのが、最も早道なのである。歌道に通じ、連歌にも関心があったらしい崇光院ならではの深読みではあろう。

世阿弥の生年と藤若命名の由来に関わる重要資料が、崇光院のすぐれた文学的素養ゆえのカン違いによって記されたとしたら、まことに皮肉なことといわねばなるまい。

『不知記』のマイクロ写真閲覧につき、宮内庁書陵部ならびに八鳥正治氏の御高配を賜った。あつく御礼申し上げる。

(早稲田大学助教授)